



水平社の精神を伝承する『水平社博物館』



展示場入口にある水平社博物館のロゴ看板が見学への高揚感を一層高める

施設探訪

水平社博物館(奈良県) 特別展「西光万吉の表現」と リニューアル後の博物館

リニューアルから3年。

人権のふるさと・水平社博物館を、北島事務局長と舩渡常任理事、富岡理事が訪問した。全国水平社は1922年3月3日、人間の尊厳と平等を求めて京都市公会堂で創立され、博物館のある奈良県御所市柏原は、全国水平社の歩みがここに端を発した地である。

創立100年を迎えた2022年には展示の見直しが行われ、水平社の理念を次の世代へと伝えるための工夫が随所に加えられた。物語や日常の言葉を手がかりに、人間の尊厳という理念を身近に感じられるよう意図された展示が特徴となっている。

例えば、展示の一角には、人気漫画『鬼滅の刃』の一場面が紹介されていた。開かれたページには、産屋敷耀哉の「永遠とは人の想いだ。想いこそが不滅なのだ」という言葉が示され、その下には水平社創立の理念を重ねる解説が添えられていた。歴史を知識として伝えるだけでなく、百年前の運動を生み出した当事者の“想い、が今日へと受け継がれていることを、子どもたちが馴染みのある表現を通して実感できるよう工夫された展示である。展示の歴史的重みを感じるとともに、現代ポップカルチャーやショートムービーを取り入れた伝え方は、特に若い世代には届きやすいアプローチで、差別を“自分のこと、として、考えるきっかけになる。

この日は、水平社創立に深く関わった西光万吉の生誕130年を記念した特

別展「西光万吉の表現」が行われていた。万吉は美術に明るい人物であったが、被差別部落出身であることが世に知られることを恐れ、類まれな才能を十分に示す前に筆を置かざるを得なかったとされる。そのため残る作品は多くないが、和洋の技法を取り入れた絵画や下絵からは、美術作品としての完成度の高さや表現の幅広さに力強さが感じられ、美術家としての万吉の姿が立ち上がってくるようだ。そこには、レジリエンスの強さと、万吉が生きた時代に存在した根深い差別の影があり、差別の中でもなお創作を追い求めた万吉の志の片鱗がうかがえた。

なかでも、水平社の象徴である荊冠旗（けいかんき）の意匠を万吉が手がけたことに触れた展示は印象深い。黒地は差別社会の暗黒を、赤い荊冠は受難と殉教、そして解放への強い意志を表すとされる。苦難の歴史と未来への願いが凝縮されたこの旗は、創立者たちの理念を視覚化した象徴として今も掲げられている。作品を描けなかった背景と、旗として残った象徴表現|両者の対比が、当時の差別の深さと万吉の葛藤を静かに浮かび上がらせていた。

館内を見学後、学芸員の方と会談をしながら質疑をする機会を設けて頂いた。まず、リニューアルしてからの反響を訪ねたところ、初めて来た方も何回か来た方も一様に「展示がわかりやすく明るくなった」とのこと。人権、水平社という難しいテーマにおいて、如何に歴史を身近に感じ理解してもら

うのかが肝要であるため、リニューアルの効果は成功というべきとのこと。また、一般の博物館はその展示を見て終わることが多いが、水平社博物館は歴史とは言えど、これをきっかけに人権のこと・部落問題のことをより知りたくなるようなきっかけを作るスタート地点の役割を果たしていると、分析されている。開催している特別展「西光万吉の表現」についての反響を伺ってみた。今回の特別展は、初めての本格的な美術展であり、美術史、文化研究、歴史学、文学などの専門家の監修の下、水平社博物館との共同研究の成果発表の機会なので、是非多くの方に見に来て頂きたいとのことだった。

取材当日、職業体験で訪れていた地元の中学生の姿があり、話を聞くことができた。水平社博物館を職業体験の場所として選んだ理由と取材時に開催していた特別展について尋ねてみると、祖父とともに水平社博物館を訪れた思い出があり、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉が好きで、この言葉を起草した西光万吉を尊敬しています。これからも西光万吉について研究をしてゆきたいと語ってくれた。その言葉からは、人権の学びが行事ではなく、地域の生活に根づいていることが伝わってきた。水平社博物館では、地域の学生の職業体験の場として活用されているとともに、奈良県は人権教育の先進地として知られているが、こうした日常的な関わりが、理



特別展「西光万吉の表現」には多くの人が訪れ、人権活動以外の『鬼才稀な才能』を鑑賞した（特別展は終了しました）

念の継承を静かに支えているのだと実感させられる。

水平社博物館は、歴史を保存するだけの場ではない。創立者たちの志に触れ、それを今日の社会へ生かすための学びの拠点であり続けている。百年前に掲げられた「人間の尊厳」という理念は、展示の工夫や地域の子どもの姿を通して、今も確かに受け継がれていることがわかる。

発祥の地に立つこの博物館が、過去と現在、そして未来を結ぶ架け橋として、これからも水平社の精神を伝え続けていくことを願いたい。



学芸員の方とリニューアル後の博物館の現状・今後の方向などについて会談する



展示を見学する北島都連事務局長（写真：左）と舩渡常任理事



リニューアル後も多くの人が訪れている